

に、社会学年報学派の宗教研究の基本的な方向性が定位される過程でもあったのである。

M・エリアーデとルーマニア民族主義

佐藤 慎太郎

一九七二年にイスラエルのルーマニア系雑誌である *Timor* に掲載された論文を嚆矢として、亡命以前のルーマニアにおいてエリアーデが、レジオナール運動と近い間柄であったということが問題として取り上げられるようになった。レジオナール運動は、ルーマニアにおけるファシズム運動として知られており、その内容もエリアーデを反ユダヤ主義者として糾弾するものであったことから大きな反響を呼ぶこととなった。この問題はいくつもの錯綜した問題圈が重なっている。それはエリアーデがほぼ沈黙を守ったことや、レジオナール運動の性格にも由来するが、本発表では、それら取り巻く状況を俯瞰しながら、彼のルーマニア期の諸活動をレジオナール運動と接近する土壌となったと考えられるルーマニア民族主義について、当時の資料からまとめることとする。

第一次大戦後ルーマニアは戦勝国として周辺国から領土を割譲され「大ルーマニア *România Mare*」を達成し、政府もさまざまな近代化政策を推し進めようとしていた。とはいえユダヤ人に代表される少数民族問題や社会不安なども同時に醸成さ

れ、必ずしも準風ばかりとはいえなかった。そのなかで登場するのがレジオナール運動である。反ユダヤ主義、反共産主義を掲げ、ルーマニア民衆に根付く正教の精神に訴えかける極めて民族主義的な信条を特徴とし、農村部を中心に広く大衆的な基盤を得ることになった。また、首領コドレアヌの強いカリスマ性、軍事的組織を保有し、時にはテロも辞さないという方針を有するという点において、ファシズム的な色彩の濃い運動でもあった。

それではそのような時代状況のなかで、エリアーデは学問的にも社会的にも「若い世代」を代表する論者として名声を得てゆくことになる。すでに学生時に「精神の旅路 *Itinerariu spiritual*」という連載記事において、自らと同年代の若者たちに向かつて、これからの新しいルーマニアを背負って立つ存在であることの自覚を促し、それにとりも新たな規範と精神の修養の重要性、精神の価値が説かれている。とはいえそこには外部からの新規なものの導入というよりは、正教的な土台にもとづく、ルーマニア精神の再発見あるいは再解釈が期待されていた。すなわち「ルーマニア民族精神 *romanism*」を称揚し、伝統的なルーマニア文化と「若い世代」を結びつけ、発表の場を変えつつ繰り返し主張しようとしていた。そのような思想的な前提の下でレジオナール運動へ接近するのであるが、評価の対象は政治団体としてというよりも、その精神活動としての側面が称えられていた。親レジオナールの記事のいずれも、レジオナール（特にコドレアヌ個人）とルーマニア民族精神との親和性とそれに対する共感を表している。

第1部会

エリアーデのレジオナル運動とのかかわりは、その精神的な側面において従来のエリアーデの主張を、理想として体现あるいは実現させると思われた点が、親レジオナル的立場を示した理由として挙げられる。後に、近代批判を伴う西洋近代人の救済という問題と深く関わる理論展開を行なっていることを考えると、いかなる社会への意識を有していたのかという点は、重要である。また亡命後の、政治的な言論への沈黙がいかなる意味を持つのか、良く知られた普遍性を志向する後の彼の宗教学と民族主義的活動は断絶しているのか、それとも形を変えて継承されているのかについても、検討されねばならないだろう。エリアーデの思想形成上の諸問題を、このような視点でとらえなおすことにより、エリアーデが固執した人間の宗教性への積極的評価や、宗教学に課した文化的・社会的役割の問題に、新たな光を投ずることが出来るはずである。

往復書簡集からみるI・P・クリアーノと M・エリアーデの関係

佐々木 啓

I. P. Culianu (クリアーノ) のルーマニア語による全集の中に一書として収められた Mircea Eliade (エリアーデ) との往復書簡集 *Dialoguri intrerupte: Correspondența Mircea Eliade - Ioan Petru Culianu* (『中断された対話：ミルチア・エリアー

ーデーヨアン・ペトル・クリアーノ往復書簡』(Jassi: Polirom, 2004) を読み解くことによって、自他共に認める緊密な師弟関係で結ばれていた Eliade と Culianu との間に見られる、他ならぬ「宗教学」の方法論にかかわる微妙な(ある意味では明白な)差異が明らかとなる。

Culianu は Eliade 宛ての手紙に次のように書いた。「私は、『Mircea Eliade と新しい人類学 “Mircea Eliade et la nouvelle anthropologie”』という論文を一〇月一日までに仕上げると約束したのです。：「新しい人類学」というのは、私にとつては、フランス人が理解するようなものではまったくありません。(それは)むしろ、Kuhn や Feysabend の認識論から生み出された新しい人類学の方であり、それは先生を大いに再評価することになるでしょう」(p. 272, 手紙 No. 105)。しかし、この往復書簡集の序文を書いた Matei Calinescu ならずとも、『Thomas Kuhn (「共約不可能である」科学的パラダイムの理論家) と(著作『方法のかたへ』で Kuhn をより過激にし、認識論的「アナキズム」の基礎を築こうと試みている) Paul Feyerabend とならぶ位置づけが、どれほど Eliade を喜ばすことになるのかは、わからない」(p. 34) というのは誰でもいさぐ疑問であろう。

他方、Eliade は Culianu 宛てのある手紙で次のように書いていた。「一部の学者達が、われわれの(そして彼ら…)分野を「科学」に変換することを望みながらも、まさしく作り上げてしまった「モデル」、そういった「モデル」に対するあなたの嫌気は、私も理解でき、共感できるものです。：結局、何